

『気づき』を促す授業の工夫

大矢裕子 持田玲子 野沢喜満子

1 主題設定の理由

今年度も、研究主題を「『気づき』を促す授業の工夫」とし、研究を進めていきたい。

英語は学校教育の中でのみ完成されるものではなく、場合によっては、生涯を通して接していくものである。新学習指導要領の解説（第1章 総説 2 外国語科改訂の趣旨）には次のように記されている。

（前略）併せて、「読むこと」、「書くこと」の指導の充実を図ることにより、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の四つの領域をバランスよく指導し、高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培う。

生涯を通して英語を学びつづけていくためには、英語を使う楽しさや世界観が広がる喜びなどを経験することが大事である。そのために私たち教師ができることは、生徒から「ああ、そうか!」「わかった!」「こうすればいいんだ!」という声を引き出すような授業をつくることである。生徒が試行錯誤し、思考・判断を繰り返す授業をつくることは、生徒を自立した英語学習者として育てていくことにつながるものと信じている。

生徒は毎時間集中して授業に参加している。ペアやグループでの活動はもちろん、ドリル的な個人作業においても集中を持続させられる生徒が多い。一見すると学習した内容を理解できているのである。しかし実際には、学習したことが定着していないと感じたり、学習したことが上手に活用されていないと感じたりすることが多かった。このような現状を何とかしたいと議論を重ね、授業と授業、知識と知識を有機的につなげることに重点をおき、生徒に「今までに身につけた知識を活用する力（活用できることに気づく力）」をつけさせることを研究することとした。

今までに学んできたことをもとに、「自分の伝えたいことを、より相手に分かりやすく伝えるためにはどうしたらいいのか」を生徒自身が思考していくとき、生徒の中には様々な『気づき』が生まれるはずである。本校英語科では、その『気づき』の繰り返しこそが、生徒の「自ら学ぶ姿勢」を養うものであると考え、『気づき』を促すための教師の役割や、学習課題などについて研究を進めていくとして本研究主題を設定した。

研究実践と新学習指導要領のねらいとのさらなる接点を探りながら、教科内の議論を深めていきたい。また、本研究は生徒に『気づき』を促すことをねらうものであるが、同時に教師自身が授業について深く省察することが求められるものでもあるので、日々の授業実践の積み重ねを大切にしたい。

なお、『気づき』には、あいさつの仕方や生活様式の違いなどを知るといった異文化理解的な『気づき』や、日本語にはないthやfの発音を知るといった音声的な『気づき』など様々なものがあるが、本校英語科のいう『気づき』とは、

書いたり話したりするときに、今までに学んだ知識（語彙・フレーズ、文構造、文章構成、文法事項などに関わる知識）を用いることができると認識すること。

である。

2 研究の目的

本研究の目的は、生徒に『伝える力』をつけさせるために効果的な授業のあり方や指導法を探ることにある。既習の知識を用いれば、自分の伝えたいことを表現できるということに生徒自身が気づくことは、英語学習を進める上でとても重要なことだと考える。生徒にそのような『気づき』をもたせるためには、教師が意図的に授業をつくりあげていく必要がある。教師には教材そのものを深く分析し、授業における教師の役割を問いなおすことが求められており、本研究では今まで行ってきた指導や研究を「生徒の『気づき』」という視点から見つめなおし捉えなおしたい。

3 全体研究との関わり

(1) 生徒につけさせたい力とそれらを育むために生徒にもたせたい問い

昨年度からスタートした全体研究の主題は、「自ら問う力を育む授業の創造 ～思考力・判断力・表現力等の育成を目指して～」である。授業において、教師は様々な役割を果たして、生徒たちの学びを支援する。しかし、いずれは教師がつかなくても生徒が自分で課題を解決することができるように育ててもらいたいという願いがある。い

わば生徒が「知的に自立する」ことを目指して授業づくりをしていると言える。何か課題に直面したとき、解決に向かうために次にどのようなことを考えればよいのか試行錯誤しながらも考えていけるようになってほしいと願う。その原動力となるのが「問い」をもつことである。問いを生み出す力、すなわち、問う力は、どの教科においても、主体的に学習を進めていく上で、大切な役割を果たすことになる。英語科でも、英語の授業を通して身につけた力を生かし、生徒自らが考え、判断し、課題を解決することを期待する。それらを繰り返しながら『伝える力』をつけさせたい。

(2) 生徒に問いをもたせる教材のあり方

①『気づき』のもととなるレディネスづくり

レディネスとは、生徒全員が次の学習活動に無理なく入ることができ、所期の目的を達成できる状態を意味する(高橋一幸氏 2003)のものであり、その状態を生徒の内面に作り出す手だてを本校でも模索してきた。表現するための基礎・基本を培うことを目指し、授業の始め5～10分間で、帯プログラムと呼ぶトレーニングや反復練習を継続して行っている。例えば、コミュニケーション活動や自己表現につながる語彙・フレーズ等を耕すためのBINGO、学習事項の復習と文構造の定着を図ることをねらいとしたDictation、音読から自己表現へつなげることを目的としたReading Marathon、人前で話すことに慣れさせるためのSpeechなどいずれも短時間の活動ではあるが、くりかえし継続することの効果は大きいと考える。

②『気づき』を促す学習課題の設定

生徒は英語の学習を始めてから、日々さまざまな『気づき』を積み重ねていく。言語習得の過程において、意識している、していないに関わらず、それは頻繁におこっているものだと思う。しかし、私たちは普段日本語を使って生活しているため、学んだことを実際の場面に即した知識、技能として定着させられるような環境がない。周囲がすべて英語を話す人たちであれば、コミュニケーションを繰り返していくうちに、生徒の英語の知識は自然と整理され、使用場面に即したものと変化していくと思う。しかし、そのような環境がない以上、それに少しでも近づくよう、教師が生徒の『気づき』を促すような課題を設定していく必要がある。

また、そのような課題設定は繰り返しおこなわれる必要がある。その繰り返しの中でさまざまな知識、技能が頭の中に呼び起こされ、表現において活用することのできる知識や技能となっていくものとする。

(3) 生徒に問いをもたせるための教師の役割

生徒に問いをもたせるための教師の役割は、さまざまなものがあると思うが、英語科では、様々な活動を仕組む際には、最終目標・最終の姿(ゴール)とそれに至る道筋を生徒に示すことにしている。

ゴールに至る道筋を示すのは、現在学習していることが次の段階へどのようにつながっていくのかを生徒に理解させることで、毎時のふりかえりを次回に生かすことが可能となり、生徒が自分自身の学びを見取ることができるようにするためである。また、モデルを示されることにより、生徒は最終の姿に対するイメージを持って活動に取り組むことが期待できる。

モデルとするのは教科書そのものであったり、教科書をもとに教師がアレンジしたものであったりと、活動内容や課題によって異なるが、提示に際しては次の3点を配慮している。

○教科書をベースに、生徒の興味関心や知的好奇心を揺さぶるものであること。

○学習したことを用いれば、課題や活動をクリアできるということに気づかせ、生徒自身が意欲を持って成果を実感しながら取り組めるものであること。

○モデルの中に自分を置き、自身の経験や考え、思いなどを表出できるものであること。

以上のことに配慮しながら、『気づき』を促すモデルの提示をしていきたい。

(4) 生徒の問いをどうみとるか(表現活動・評価)

学んだことは活動が終わると忘れてしまうおそれがある。忘れないにしても、次に同じような場面に出会ったとき、思い出されるまでに時間がかかることは予想できる。頭の中にあるものは、ある程度くりかえし思い出されていなければ、出てこないものだと思う。そこで、生徒が自分の思考・判断の過程や結果などを何らかの形で記録しておくことが重要であると思う。

例えば、初対面の相手に自己紹介をするとき、早口では伝わらないので、自分の名前をゆっくりはっきりと読むこ

とが重要であると学び、それを記録しておけば、同じような活動の場面に出くわしたとき、それに気づき、過去の学びを生かして活動に取り組むことができる。

学習感想用紙、ふりかえりシートなどを活用して、記録を取らせることは、将来、生徒自身に『気づき』を与えることにつながる方法の1つであると考え。しかし、記録を毎時間取り続けることは現実には難しいため、ある単元に絞ったり、何か活動をしたあとなどに限定したりして行っていきたい。記録用紙については1年間同じものを使うなどして、何度も見返せるようにすることで生徒自身に『気づき』を促し、既習事項を生かす習慣をつけさせることが期待できる。

4 研究経過

まず、研究を推進するにあたり、キーワードとしてきたのが『伝える力』である。本校英語科では『伝える力』を以下のように定義する。

身の丈にあった英語を用いて、自分の言いたいこと、考えや気持ち等を話したり、書いたりするなどして伝えることができる力

この『伝える力』を生徒につけさせることが、本校英語科の目標であることを確認し、これまでの研究のあゆみをふりかえってみたい。

H17～19 研究主題 『伝える力』を高める授業の工夫 ～教科書を発展的・創造的に用いた活動を通して～

本主題で研究をスタートさせてから最初の3年間は、『伝える力』を生徒の実態に合わせて6つに分類し、それぞれの『伝える力』を高めることを目的とした活動・課題の開発に研究の主眼を置いていた。

◇『伝える力』の分類

- ①聞き手に十分に伝わる声の大きさを音読したり、英語を話したりすることができる力
- ②スピードや抑揚、間などを大切に音読したり、話したりすることができる力
- ③伝えたい内容に見合った身振り・手振りや、実例・実物などの提示を交えて、聞き手を意識した効果的な発表をすることができる力
- ④教科書の基本文や本文で使われている表現などをモデルとして、既習の学習事項や語句・語彙をできる限り用いて伝えたい内容を話したり書いたりすることができる力
- ⑤知っている語句や優しい表現を用いて説明したり、言い換えたりすることによって、聞き手や読み手の理解を助けることができる力
- ⑥文の配列や順序性を吟味して、伝えたい内容を話したり、書いたりすることができる力

しかし、分類したとおりに明確な線引きをすることは難しく、ある『伝える力』が他のすべての『伝える力』のベースになっていたり、それぞれの『伝える力』が相互にかかわり合っていたりすることを強く実感することとなった。

H20～22 研究主題 『伝える力』を高める授業の工夫 ～伝えることへのレディネスづくりを意識して～

知識・技能面のレディネスを備えさせることと同様に、心理面（気持ちの面）での準備状態を生徒の内面に作り出し、表現活動に臨ませることも重要であると考えた。心理面のレディネスづくりのため、以下のようなことを意識して学習過程を考えてきた。

- ①小さなハードルを一つ一つクリアさせ、自信と意欲を持って次の段階へ進むことができるように段階的な指導を取り入れる。
- ②お互いにアドバイスをし合い、最終ゴールに向けて自分が今どういう状態にあるのかを理解させ、どのように改善していけば良いのかを意識させる。
- ③練習段階において、上達していることを実感させる。
- ④表現する前段階として、「聞く」「読む」ことによって「話す」「書く」ためのヒントを与え、イメージづくりをさせる。

このようにしたことで、生徒は表現することへの安心感を持つことができ、発表の際の自信につながったと感じ、

生徒の内面に心理的な部分でのレディネスを作り出すことができたと考えている。

H23～ 研究主題 『気づき』を促す授業の工夫

昨年度より研究主題を「『伝える力』を高める授業の工夫」から上記のように変更し、研究を進めている。生徒に『伝える力』をつけさせることを目標にしていくという点では研究の方向性は変わらないが、生徒の『気づき』という視点から、学習活動・課題のあり方や教師の役割を捉えなおすことをねらいとしている。

5 研究内容

- (1) これまでの研究の成果と課題をふまえ、生徒に『気づき』を促す手だてや、活動・課題のあり方を探り、授業実践を通してその有効性を探る。
- (2) 学習段階に応じた指導計画や毎時の学習過程の工夫が、生徒の『気づき』にどのような効果を及ぼしたのかを検証する。
- (3) 発問やフィードバックなど授業における教師の働きかけが、生徒の『気づき』とどのようにかかわるのかを検証する。

6 今年度の実践例・・・HP参照 中等教育研究会より

第2学年 英語科学習指導案

授業者 大矢裕子

1. 単元名

Let's introduce our town!! ～私たちの住んでいる地域を紹介しよう～

(NEW HORIZON English Course2 Multi Plus 2 町紹介)

2. 単元について

本単元では、ある中学生が自分の住んでいる町を外国の友達に紹介する場面が設定されている。今後の英語の授業の取り組みとしてそのようなことが計画されている。まさに教科書で学習したことを「生きた場」に持ち出して活用するのに格好の題材である。それに向けて、やりとりを練習させたい。

本単元で扱う言語材料は、There is / are ～. 構文である。身の回りにある施設や場所、ものを説明する方法として、今回の活動の中でも積極的に活用させたい。また、別の単元での学習事項にはなるが、whenやthat, becauseといった接続詞も活用させたい。それらを活用することによって、これまで単文によって構成されていた文章が、よりまとまりをもって表現できるようになる。自分の思いや考えを伝えるI think (that) ～. の構文や、理由を付け足すbecause節などは、自分の伝えたい場所を伝える文章の中でも活用できると思われる。また、今までに学習してきた不定詞や未来表現、助動詞などを統合的に使用する機会としたいという思いもある。これまでの学習において、言語材料や表現方法を適切に使い、伝えたいことを一つ一つ英文にしていっていただけにとどまらず、紹介文全体を一つのまとまりととらえ、前後の文同士のつながりや一連の流れについても考え表現することが、聞き手にとってわかりやすいものになることを学習した。文法や文構造の定着を図るトレーニング的な活動では感じられなかった表現の広がりを実感させることで、知らないことを知る楽しさ、学習したことを使える喜びなどを味わわせ、さらなる表現意欲につなげていきたいと考えている。

教科書では、自分の住む町の紹介を題材にしているが、自分の住む町、市、県と少し幅を持たせて取り組ませたい。生徒自身の日常的な生活、個人的な経験や体験とかかわることで、「表現してみよう」という意欲を引き出すことができると考えたからである。英語で自分の住む場所を紹介する実際の場面が想定されていることが、活動の最大の動機付けとなり、どのように説明すれば良いのかを学習する良い機会となると考える。

今回は、ビデオレターを活用することとした。生徒に相手に伝えるという高いモチベーションを持たせられる利点や教師が作り上げるまでの過程を工夫することで、生徒に多くの学びを持たせられるであろうと思うからである。また、相手に伝えるだけでなく、あとでクラスの仲間と見合い、振り返りをするすることで、さらに学習を深めることができると考える。

生徒が作る英文はバラエティに富んだ内容になることが予想される。「伝えたいこと」を表現することができたと感じ取らせるために、教師は周到な準備と生徒がつまずくであろういくつかのケースをあらかじめ想定し、適宜、指

導と支援を施していくことが必要になると思われる。

この単元の学習過程で、生徒たちは様々なことに気づくと予想される。この単元全体を通して、本校研究主題である『自ら問う力を育む授業の創造 ～思考力・判断力・表現力等の育成を目指して～』にも迫れるものであると考える。

3. 単元の指導目標

- 自分の住む地域について、自分の考えや思いを入れながら、その魅力を紹介する。
- 相手に伝えることを意識して書いたり、話したりする。
- 他の人の発表を聞いて、また別の紹介の表現を知る。

4. 単元の指導計画 (全6時間)

時間	○ねらい ・学習活動
1	○本単元に身に付ける文の構造や理解する内容を知る。 ・ビデオレターのモデルを見る。 ・Multi Plus 2で身に付ける技能や理解する内容を知る。 ・教科書本文の内容理解と文章構成理解 (work sheet I) ○町や観光地を紹介するときの表現を確認する。 ・教科書で用いられ、これまでに学習した町や観光地を紹介するときに使われる表現を復習する。(work sheet) ○ビデオレターの紹介文のモデルを理解する。 ・ビデオレターのモデルを見て、紹介文のイメージを持つ。 ・自分の紹介したい場所について考える。(work sheet II)
2	○自分の住む地域についての紹介文を書く (個人) ・モデル文を復習し、自分の住む地域についての紹介文の構成を考える。(work sheet) ・伝える相手を意識しながら、魅力がわかりやすく伝わるような紹介文を書く。 (work sheet I), (work sheet III) ○まとまりのある文章の構成について理解する。 ・紹介文についての文章構成を理解する。(work sheet IV)
3	○私たちの住んでいる地域についての紹介文を書く。〔本時〕 (グループワーク) ・自分の住む地域について興味を持ってもらえるような紹介文 (ビデオレターの原稿) となるよう、表現の工夫を考える。 ・伝える相手を意識しながら、魅力がわかりやすく伝わり、自分たちの気持ちも届くような紹介文 (ビデオレターの原稿) を書く。(work sheet V)
4	○私たちの住んでいる地域について、相手を意識して紹介の練習をする。(グループワーク) ・グループでつくった原稿を伝える練習をする。 ・よりよく伝わる伝え方について考える。
5	○自分の住む地域について紹介する。 ・ビデオレターの撮影をする。 ・仲間の撮影を見ながら、他グループの工夫点を見つける。(work sheet VI)
6	○本単元のまとめ ・自分のグループのビデオレターや他グループのビデオレターづくりを通して学んだことや気づいたことを共有し合う。(ふり返りwork sheet)

5. 本時の授業

- (1) 日時 平成24年10月6日 (土) (10:10~11:00)
 - (2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属中学校 2年2組教室
 - (3) 題材名 「Let's introduce our town !! ～私たちの住んでいる地域を紹介しよう～」
 - (4) 本時の目標
- 自分の住む地域に興味をもってもらい、自分たちの思いも届くよう、相手を意識して紹介文を書いたり、書き直したりすることができる。

○仲間との紹介文づくりを通して、表現を工夫したり、考えを深めたりすることができる。

(5) 自ら問う力を育むための手だて

- ・生徒が「書いてみよう！」という知的好奇心を持てるような場面設定をする。
- ・グループ内でアイデアや工夫点を交流する場面、クラス全体でアイデアや工夫点を交流する場面を設定し、それを通して自分の住む地域の魅力を伝える紹介文の工夫をさせる。

(6) 展開

Procedure & Time	Student's Activity	Teacher's Activity & Help	Remarks
Greeting Warm up (Basic Skill Training) (5)	<ul style="list-style-type: none"> ・英語で挨拶を交わす。 ・英語で、日常的な会話をする。 ・町紹介のディクテーションをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・英語で挨拶をする。 ・英語で、日常的な会話をする。 ・町紹介のディクテーションをする 	顔を上げて大きな声で Activity I,IIで使える表現となる。
ActivityI (10)	<ul style="list-style-type: none"> ・4つの紹介文とそれらを一つにした紹介文（ビデオレターの原稿）に注目する。 ・提示した紹介文の原稿について、感じたことを発表する。 ・魅力が伝わるビデオレターについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・4つの紹介文とそれらを一つにした紹介文（ビデオレターの原稿）を提示する。（気づきを促すための例の提示） ・提示した紹介文の原稿について、感じたことを発表させる。 ・魅力が伝わるビデオレターについて考えさせる。 	★ビデオレターの原稿を見ながら、よりよい紹介文について考える場面
ActivityII (15)	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">魅力あるビデオレターとなるよう、原稿の表現を工夫しよう！！</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビデオレターの原稿づくりの条件を聞き、本時の目標と活動内容を把握する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>目 標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山梨について興味を持ってもらえるような紹介文の表現をグループで考えよう！！ ・相手を意識して、魅力がわかりやすく伝わるような紹介文を書こう！！ <p>条 件</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自作の文を1文は入れよう！ ・みんなの山梨（山梨のこと）に対する思いを入れよう！ ・10文以上で書こう！ </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオレターの原稿づくりの条件を提示し、本時の目標と活動内容を把握させる。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・個人でつくった紹介文を持ち寄りグループで検討しながらグループの紹介文づくりをする。 ・個人で書いた紹介文を見せ合う。 ・どのような組み合わせ方が最適かを検討する。 ・どのような表現を使えば、相手にわかりやすく、魅力が伝わるかを検討する。 ・グループの紹介文（ビデオレターの原稿）を書く。 ・グループの紹介文づくりで出てきた工夫点を発表する。 ・他のグループの工夫点を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人でつくった紹介文を持ち寄りグループで検討しながらグループの紹介文づくりをさせる。 ・個人で書いた紹介文を工夫して組み合わせ、グループの紹介文（ビデオレターの原稿）をつくらせる。 ・グループの紹介文づくりで出てきた工夫点を発表させ、全体で共有させる。 	<p>★グループで、話し合いながらよりよい紹介文について考える場面</p> <p>★他のグループの工夫点を知る場面</p>

ActivityⅢ (15)	・全体で共有した他グループの工夫も生かして、紹介文づくりの続きをする。	・全体で共有した他グループの工夫点も生かして、紹介文づくりの続きをさせる。	★他グループの工夫点を聞いて、自分たちの紹介文に生かす場面
Consolidation & Greeting (5)	・授業を通して考えたこと、感じたこと、思ったことをワークシートにまとめる。 ・教師のフィードバックを聞き、自身の活動を振り返る。 ・英語であいさつをする。	・授業を通して気づいたことをワークシートにまとめさせる。 ・活動の様子を振り返り、成果と課題をフィードバックする。 ・英語であいさつをする。	本時の気づきが次時に生かされるような、投げかけを心がける

7 生徒のみとり（中等教育研究会の授業について）

生徒の問いをどう見とるかについてであるが、授業の終わりや授業のあとで、自分の工夫した点やクラスの仲間の発表や評価等を聞いて、自分が発表する際参考になったことや参考になった表現などの記録をさせ（メモする機会を作り）、それについてどう思ったか等コメントを書かせてきた。自分の発表をもっと良くするにはどうしたら良いかという問いをもった生徒であれば、仲間の発表や評価から、参考となったことを書いたり、それらを応用して文を作ったりするであろう。

また、反省や感想を書かせ、毎回学んだことを次にどう生かしたいか、友達の発表を聞いてどう思ったかなどを書くことによって、生徒自身の『気づき』をより確かなものにさせたかった。そこで、学習感想用紙、ふり返しシートなどを活用して記録を取らせ、生徒自身がそれぞれの『気づき』をふり返ることができるように取り組ませた。実際の授業での様子とこれらワークシート等から、生徒にどのような問いを、どのようにもたせることができたのかをふり返ってみたい。

中等教育研究会時の授業の目標を

○自分の住む地域に興味をもってもらい、自分たちの思いも届くよう、相手を意識して紹介文を書いたり、書き直したりすることができる。

○仲間との紹介文づくりを通して、表現を工夫したり、考えを深めたりすることができる。

とした。これに対して、以下のような方法で迫ってみた。

自ら問う力を育むための手だてとして、

- ・生徒が「書いてみよう！」という知的好奇心を持てるような場面設定をする。
- ・グループ内でアイデアや工夫点を交流する場面、クラス全体でアイデアや工夫点を交流する場面を設定し、それを通して自分の住む地域の魅力を伝える紹介文の工夫をさせる。

まずは、生徒に問いを持たせるということに関して、3つの観点から、中等教育研究会の授業をふり返ってみる。

A) 生徒につけさせたい力とそれらを育むために生徒にもたせたい問い

今年度の全体研究と英語科の研究に関わって、生徒につけさせたい力とそれらを育むために生徒にもたせたい問いとは、次のようなものであった。

◎生徒につけさせたい力は、

○学習した言語材料や文法事項など、既習の知識を用いて自分の言いたいことを表現し伝える力であり、公開研究会の授業においては、

- ・様々な既習表現を用いて、自分の住む地域について紹介する

ということになる。また、それを達成するために、

◎生徒にもたせたい問いとは、

○授業を通して身につけた力を生かし、生徒自身が思考判断するときの問いであり、公開研究会の授業においては、

- ・目的にあった、紹介文とはどのようなものか？
- ・自分の伝えたいことを、より相手に分かりやすく伝えるにはどうしたら良いのか？

などのような問いをもってほしいと思いながら授業を行った。生徒たちからも「相手に分かりやすく伝えるには、具体的にどうしたらいいのだろう？」「伝える相手について、もっと考えた方がいいのではないか？」といった意見が出された。ここからわかることは、自分の住む地域に興味をもってもらい、自分たちの思いも届くよう、相手を意識

して紹介を書こうとする目標を意識した生徒の取り組みが感じられる。これまで身につけた知識を生かし、どうしたらよいのかと思考判断がなされていると言えるのではないだろうか。

B) 生徒に問いをもたせる教材のあり方

まず重要なのは、生徒が「書いてみよう!」「言ってみよう!」という知的好奇心を持つことであると思う。生徒自身が目標に向けて取り組もうとする課題設定であるかどうかということが大切であると思うのだ。本単元は、教科書で学習したことを「生きた場」に持ち出して活用するのに格好の題材であった。また、提示するモデルには、生徒にも挑戦できそうなレベルの文章を用い、できるだけたくさんの既習文法を使った文を載せ、何事もまず、生徒にできると感じさせようと考えた。それが活動を活発化させる要因になりうるとも考えたので、モデル文のレベルを吟味し、最適なものとなるよう配慮した。生徒自身の日常的な生活、個人的な経験や体験とかかわることで、「表現してみよう」という意欲を引き出すことができると考えたからである。英語で自分の住む場所を紹介する実際の場面(オーストラリアの中学生に伝える)が想定されていることが、活動の最大の動機付けとなり、相手を十分意識して、どのように説明すれば良いのかを学習する良い機会となったと考える。

また、学習過程の工夫に関してであるが、語彙や文法事項などについての知識は豊富であり、それらに関する発問には瞬時に反応し、積極的に発言する生徒が多い。しかし、その知識をテストや英語の勉強に役立つものとしてしまい込んでいては、“コミュニケーションのための道具”という言語としての本質的な働きを生徒に実感させることはできない。それどころか、英語を学習する意味すら、見失わせてしまうとも限らない。自分のことを表現するための十分な知識を持っているにもかかわらず、活用する力は十分に備わっていないので、学習した語彙や文法事項などを活用する表現の場、表現のチャンスを計画的に取り入れたい。そうすることで、表現に至るまでの過程でその知識を活用することに気づき、また、表現されたものを聞き合うことで、別の活用方法に気づくことができるであろうと考え取り組んだ。実際に、4人グループでの活発な意見交換やクラスの中で、グループ等から出た意見を聞く場面でも「あっ、そうかあ。」「ここをこうすればいいのではないか?」と言った反応が聞こえてきたことから、別の表現方法にも気づくことができたと思う。しかし、話し合いを止められなくなかった、もっとじっくり吟味したかったという前向きな、積極的な生徒やグループがいたことも事実である。指示を整理しておき、最初にすべてを伝えるなど、より授業のマネジメントを工夫していきたいと思う。

C) 生徒に問いを持たせるための教師の役割

生徒が問いを持つのは、自分の言いたいことを英語で文章にしようとするときに、どんな単語を使って、どんな文法で、どのように文を組み立てるかを考えるときであろう。だから、モデル提示のときに、使われている文法や表現等をさらっと流してしまうのではなく、どこにどんな文法が使われているか、どこから引用したのかを丁寧に説明したり、時には生徒が戸惑う場面をわざと設定したりするなど、試行錯誤させる時間を大切にしたい。これについては、この授業だけではなく、この授業に至るまでの授業の中でも、繰り返してきたことである。机間巡視の際にも、生徒とコミュニケーションを取り、どの単語や文法を使えば表現したいことが英文にできるのかというヒントをアドバイスした。

モデルの提示の仕方については、『気づき』を促す活動を仕組むためにも、最終目標・最終の姿(ゴール)とそれに至る道筋を生徒に示すことにしている。モデルを示されることにより、生徒は最終の姿に対するイメージを持って活動に取り組むことが期待できる。

モデルとするのは教科書そのものであったり、教科書をもとに教師がアレンジしたものであったりと活動内容や課題によって異なるが、モデルの提示に際してこれまでも配慮してきているのは、次の3点である。

- 教科書をベースに、生徒の興味関心や知的好奇心を揺さぶるものであること。
- 学習したことを用いれば課題や活動をクリアすることができるということに気づかせ、意欲を持って、生徒自身が成果を実感しながら取り組めるものであること。
- モデルの中に自分を置き、自分自身の経験、考え、思いなどを表出できるものであること。

このモデルの提示については、教師から生徒への一方的なものにならないようにしたい。提示されたモデルを読んだり聞いたりした生徒自身が、よりわかりやすく伝えるためにはどうすればよいかを考え、試行錯誤してモデルに近づこうとするものを提示していきたい。生徒が自ら考える場を設けることで『気づき』が促されるものと考えている。

様々な観点から生徒の問いをふり返ってみたが、適切な場面設定により、生徒は「書いてみよう!」「言ってみよう!」という知的好奇心を持つことができ、その思いがバネとなり、

- ・目的にあった、紹介文とはどのようなものか？
- ・自分の伝えたいことを、より相手に分かりやすく伝えるにはどうしたら良いのか？などの問いを持ち、さらに、授業の中の課題や発問にも促され、新たな問いももち、それらを解決していこうとする姿を見ることができた。これまでの学習の積み重ねからの『気づき』が現れており、気づきを一過性のものにしないという意図が見えた授業であったと思う。

引き続き、生徒に問いをもたせる教材のあり方や生徒に問いを持たせるための教師の役割について研究を深めることで、英語の授業を通して身につけた力を生かし、生徒自らが考え、判断し、課題を解決することを期待する。それらを繰り返しながら『伝える力』をつけさせたいと思う。

[資料 I 学習の振り返りシート]

[資料Ⅱ Video letterの原稿]

WORK SHEET

Hello everyone !!
 Now we are going to talk about our prefecture
 We live in Yamanashi.
 It's at the center of Japan.
 Do you know Yamanashi?
 There is a famous mountain named Mt. FUJI.
 It's the highest in Japan and very beautiful.
 At the foot of Mt. Fuji there is a lake
 called Motosu.
 Look at this.
 It's a Japanese one thousand yen note.
 Like ten dollars in Australia. You can see
 a picture of Mt. Fuji and lake Motosu on it.
 Yamanashi has delicious foods and interesting
 history to know.
 There is a famous Samurai called Takeda Shingen.
 He was a great person.
 Yamanashi has very delicious food called Houtou.
 It's a thick noodle soup with a lot of vegetables.
 We think Yamanashi has many good places.
 Please come to Yamanashi.

WORK SHEET

Hello, everyone!
 We are going to talk about our prefecture.
 We live in Yamanashi.
 It's in the middle of Japan.
 Do you know Yamanashi?
 Yamanashi has some good points.
 We selected some special good points.
 1. There are delicious fruits.
 Yamanashi grows the most grapes in Japan.
 There are many kinds.
 2. There are many crystals, too.
 Yamanashi also makes beautiful jewelry.
 Please check it out.
 3. There is a famous mountain named Mt. FUJI.
 It's 3776 meters high, the highest mountain
 in Japan. There is a shrine on the top.
 4. A new train line is under construction.
 It's a magnetic train and very fast.
 I think that it will be active in the future.
 You so if you come to Japan please take this train.
 There are other famous things in Yamanashi too.
 Please come here.

WORK SHEET

① Hello, everyone.
 ② We are going to talk about our prefecture.
 ③ We live in Yamanashi in Japan.
 ④ It's next to Tokyo.
 ⑤ Yamanashi is country side, not like Tokyo.
 ⑥ But it's famous for its beautiful nature and
 delicious food.
 ⑦ Here are 3 famous things about Yamanashi.
 1. The highest mountain in Japan.
 ⑧ 2. Shosenkyo and crystals.
 ⑨ 3. Houtou, a thick white noodle soup.
 ⑩ Do you know these?
 ⑪ Number one, people call it Mt. FUJI.
 Mt. FUJI is a beautiful mountain.
 So we must keep it clean.
 ⑫ Number two, Shosenkyo has beautiful nature.
 There is a clear river and big falls.
 Autumn is the best season to go there because
 leaves change colors.
 We call it "houyou". It's so beautiful.

WORK SHEET

⑬ Shosenkyo is also famous for its crystals.
 Crystals are very beautiful.
 Crystals from Yamanashi are the most
 beautiful in Japan.
 ⑭ Number three, we call this "houtou".
 Houtou has a lot of vegetables.
 It's very delicious.
 Houtou is a specialty of Yamanashi.
 ⑮ We like Yamanashi very much.
 ⑯ Please come to the Yamanashi and visit these
 beautiful places.
 ☺ Thank you!

WORK SHEET

We are going to talk about our town.
 We live in Yamanashi.
 It's in the middle of Japan.
 Do you know the highest mountain in Japan?
 It's Mt. Fuji in Yamanashi.
 It's 3,776 meters high.
 The mountain has snow on its peak.
 It melts into clear water.
 There is Fuji Q highland at the foot of Mt. Fuji.
 It's an amusement park.

WORK SHEET

There are a lot of roller coasters.
 Some of them are in the Guinness Book.
 And Yamanashi is famous for its night view.
 The city lights look like many stars in the night sky.
 It's really beautiful.
 So we love Yamanashi.
 We hope you will come here someday.

8 今年度の研究のまとめ

生徒の『伝える力』をより豊かなものにしていきたいという思いで、これまで何年もの間、「『伝える力』を高める指導の工夫」というテーマで研究を続けてきた。『伝える力』を分類したり、「伝えることへのレディネスづくり」を研究の中心にするなど、様々な観点から研究を進めてきた。これらの研究を通して、課題に積極的に取り組む生徒たちの姿を見ることができ、英語に対する興味関心の高まりを感じるなど、成果も得られたが、書くための準備（語彙、有効な表現、適切な文構造など）、発表に向けての準備（練習）、心の準備には時間が必要であることが明確になった。それゆえ、十分な時間を教師が上手に確保し、「伝える場」が生かされ、英語を使う喜びを体感できる活動を授業者が仕組むことにより、コミュニケーション能力の育成につなげたいという思いをもってきたのである。

我々英語科の研究として、『伝える力』を高めたいという方向性は依然として変わっていない。また、「レディネスづくり」「帯プログラム」「4技能のかかわり」などは全てが関係し合っていて、切り離せない取り組みでもあるので、これらは授業をする上での根底に置き、今年度も昨年度に引き続き取り組んできた。昨年度は特に、「モデルの提示」について研究を深めた。授業研究を重ねる中で、少しずつではあるが、『気づき』を促す手だて等を具体的にすることができるようになったと感じた。広くて浅い研究になってしまわぬよう、柱を明確にして研究を深めていきたいと考え、今年度も『気づき』に焦点を当てて研究を進めてきたが、『気づき』を研究すればするほど広がり、明確にしていくのに苦労した。『気づき』について、もっと明確にしていくことも課題である。

知的好奇心を揺さぶり、思考・判断するような活動や課題を設定することで、生徒は既習の知識を用い、書いたり話したりできることに気づき、表現しようとする姿を見せてくれた。これまでのこれらの研究の成果を生かし、活動（課題）のゴールに至るまでの指導計画や毎時の学習過程の見直しをし、生徒に『気づき』を促す手だてや、活動、課題となるようなアイデアを出し合い、実践を積み重ね、その有効性を探っていきたいと思う。焦点を絞る部分と、広い視野から本研究を見つめてみる部分、この両者を関連させ、今年度の実践と成果を生かし、本研究の最終年度につなげていきたいと思う。

9 参考文献等

- 「自己表現活動」を取り入れた英語授業 田中武夫・田中知聡 著（大修館書店） 2003
- すぐれた英語授業実践 樋口忠彦・緑川日出子・高橋一幸（大修館書店）1999
- 山梨大学教育人間科学部附属中学校平成23年度研究紀要
- 文部科学省「中学校学習指導要領解説 外国語編」平成20年9月